

# R

KANSAI  
UNIVERSITY  
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

# reed

No. 30

August, 2012

関西大学ニュースレター  
発行日：2012年(平成24年)8月31日  
発行：関西大学 広報室広報課  
大阪府吹田市山手町3-3-35  
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121  
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



■リーダーズ・ナウ ー5  
在学生ー 人間健康学部3年次生  
山本 夕貴さん  
卒業生ー ボッチャ 選手  
高田 信之さん

■研究最前線  
電力の独占と規制改革の研究  
送電分離で発電と流通に競争を！ ー7  
法務研究科(法科大学院)ー 瀧川 敏明 教授  
中性子ラジオグラフィによる流動沸騰系の研究  
熱流動現象を可視化・定量評価 ー9  
システム理工学部 機械工学科 熱工学研究室  
ー 梅川 尚嗣 教授

■トピックス [学内情報] ー11  
• LSI 実装技術で世界初の成果を国際学会で発表  
3次元LSI貫通電極のオールウェット形成  
• 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択  
希薄水溶液中の有価物・有害物質の分離を通じた  
水環境技術開発拠点の形成  
• ロンドン五輪に本学現役学生が出場  
4×400メートルリレーで東佳弘さんが快走

■社会貢献・連携事業/地域連携 ー13  
関西大学3キャンパスで市民参加のイベント実施  
高槻ミュージックキャンパス/高槻キャンパス/堺キャンパス  
社会的信頼システム創生センターが中心となって  
連携事業を展開

■関大ニュース ー15  
竹内洋・東京センター長が読売・吉野作造賞受賞

自分の道を見つけて突き進む  
六代桂文枝を襲名、創作落語に生きる  
■対談 桂 文枝 落語家、公益社団法人上方落語協会会長 十上原 洋允 理事長

# KATSURU

# UNSHI



自分の道を見つけて  
突き進む

六代桂文枝を襲名、創作落語に生きる

- 桂 文枝 ・落語家、公益社団法人 上方落語協会会長
- 上原 洋允 ・理事長

上方落語の大名跡、桂文枝を襲名。

7月16日、228作目となる創作落語「さよならサニー」をもって最初の襲名披露公演を行った。

桂文枝さんの落語家人生の原点は、関西大学の落語研究会「落語大学」にある。

その笑いはキャンパスから全国へと広がり、今も創作落語一筋の前人未踏の道を突き進んでいる。

◆「関西大学落語大学」の学長に就任

上原 桂文枝さんが関西大学の学生時代に仲間と創設された「関西大学落語大学」は、後輩たちに受け継がれて、今も活発な活動を続けています。文枝さんが落語の道に進まれるきっかけになったのは、関西大学1年次生の秋に、学内で桂米朝さんの落語に出会ったことでした。今年5月に日経新聞に連載された「私の履歴書」で、文枝さんは、「米朝師匠の落語には知的な香りがした」と、「巧みな話術と身ぶり」と、半分ほど年下の若者を自分の世界に引きずり込み、自在に沸かせている姿を見て衝撃を受け、自分にとって打ち込むべき対象はこれではないかと直感的にひらめくものがあった」と語っておられますね。

文枝 関西大学で学んだことが、人生の大きなポイントだったと思います。大阪の皆さんにも愛される大学で、学生の気風はバンカラ精神にあふれていました。進学校ではない商業高校の出身だったので、誰も知り合いがいなくて、よく図書館へ行って本を読んだりしていました。それもよかったです。そんなとき、他の落語家ではなく米朝師匠に会えたことが大きな刺激になりました。非常に知的で、そして若者も笑わせる。それまで見てきた漫才などの笑いとは違って、知的に笑わせるところが僕の琴線に触れたという感じです。

ちょうど国文学科の教授と有志の学生らが落語研究会を立ち上げようとしていたところでした。落語の研究にとどまらず、僕はなんとか実演したいと思いました。

上原 そこで、初代の実技学部長に就任されたわけですね。大学にあやかって関西大学落語大学の看板を掲げ、2年次生のときに学長に就任されました。そういうアイデアがまた面白い。

文枝 そうすると芸名もほしくなります。自ら「浪漫亭ちっく」と名乗り、他の学生の芸名も僕が全部つけました。

上原 芸術の中に芸能があり、芸能の一つに落語があります。巧みな話術と身ぶり手ぶりで観客を喜ばせ、そして感動させる。米朝さんの落語は、まさしくそういう芸能でした。それを目の当たりにして、「くすぶっていた自分にとって、身を打ち込むべき対象はこれなのではないか。直感的にひらめくものがあった」と。これは大きな収穫でしたね。関西大学に入られて、そこで文枝さんの将来への道が開けてきたわけです。

文枝 落語家は年季が求められる商売ですが、大学時代に過ぎた時間は、その後の落語家人生で大いに役立ちました。キャンパスの自由な雰囲気の中で、親しい仲間もできました。僕が落語家を志して桂小文枝(五代目文枝)師匠に弟子入りするとき、

仲間が大学前の通りに集まり、送別会をやってくれました。だから、彼らにブッシュされて、苦しくてもやめなかったと思うのです。

◆関西大学に入ったことで人生の方向が決まる

上原 「私の履歴書」を読みますと、ご両親の遺伝子を受け継がれていることも感じました。生後11カ月のときに亡くなられたお父さんは銀行員でしたが、洒落な人柄で、演芸好きだったそうですね。当時の花月などで見てきたばかりの出し物を同僚に披露し、職場を沸かせておられたとか。文枝さんは高校時代に放送部から演劇部に移り、部長を務め、演出も手がけられた。そういう持って生まれた才能が、関西大学入学後に目覚めたのでしょうか。

文枝 中学時代までは、絵を描くことが好きな、どちらかと言えば内向的な子どもでした。ところが、大阪市立市岡商業高校(当時)に入学してから、持ち前の面白がりの面が表に出てきたのです。そのころ、家にテレビが入り、コメディ番組に夢中になりました。さっそく演劇部の親友と漫才コンビを組み、ラジオの素人番組に出演したりしました。



■対談



桂 文枝(かつら ぶんし)  
1943年大阪府生まれ。63年関西大学商学部入学。落語研究会「関西大学落語大学」で「浪漫亭ちっく」として活躍、落語大学学長を務め、東西大学対抗落語大会などを企画。66年中途退学し、桂小文枝(五代目桂文枝)に入門。67年からラジオ深夜番組「歌え！MBSヤングタウン」で一躍人気者になり、テレビのバラエティ番組などに数多く出演。落語家として228本の「創作落語」を発表し、独自の世界を築く。2012年7月六代桂文枝を襲名。03年より上方落語協会会長。06年紫綬褒章受章。07年菊池寛賞、11年日本放送協会放送文化賞受賞。

演劇と漫才にのめり込んでいるうちに、成績が悪くなり、特に必修の珠算や簿記に対する興味を完全に失いました。就職先も思うようなところがなく、それじゃ勉強して大学に行ってみよう、クラスでただ一人、進学を希望しました。高校を出てすぐ働き、それで自分の人生が決まってしまうのが納得いかないというか、もうちょっといろんな世界を見てみたいという気持ちでした。もちろん、母一人子一人の家庭で、これ以上母親に苦勞をかけたくないという思いもありましたが……。

1年間、浪人生活を送りました。郵便局でアルバイトをしながら予備校にも行きましたが、結局どちらも辞めてしまい、秋からは図書館に通うようになりました。受験時代の体験は、後にラジオ番組を持ったときに役立ちましたね。

上原 お母さんは終戦後、ずいぶん苦勞されたことと思います。それでも、明るさを失わずに、一人息子をお育てになった。私の母もそうでした。私は6人兄弟の末っ子で、6歳で父親を亡くしました。香川県の田舎の小地主でしたが、戦後は食べるもの

「宇宙の大きさに比べて、人間の人生のなんと小さなものか」。どうせ小さな人生なら、決断すべきときは大きく勝負に出るように、この言葉が僕の背中を押してくれました。

もなく、私は中学校を中退して大阪へ働きに出てきて、城東区の機械工場に勤めながら定時制高校に通いました。

文枝さんが米朝さんの落語に接するまで、何をやりたいのかわからず、もやもやした気持ちでくすぶっていたとおっしゃったことはよく分かります。私も弁護士になりたいという確固たる目標を持って大学に入ったわけではありません。将来の方向や進むべき道は、入った大学によって大きく左右される面があります。私は法律学校としての良き伝統がある関西大学に入学し、先輩にも恵まれて、法律の道に進むようになったのです。

父親を早く亡くしたこと、母親が苦勞して育ててくれたこと、そして関西大学に入って方向性が決まったことなど、お互いに似ているところがありますね。

◆落語の世界に飛び込むことを決断

文枝 理事長は勉強一筋ですが、僕も初めは勉強して母を楽にさせようと思ったけれど、落語に出会ってしまい、その魅力に取りつかれたという感じですね。

上原 持って生まれた遺伝子があり、学生時代に才能が芽生えて、それに目覚めて努力されたということですよ。落語家を本業にできるかどうか、お客さんはお金を払ってまで聴いてくれるかどうか、必ずしも自信があったわけではないけれど、大学生活を切り上げて飛び込んでいかれた。その飛び込みは、なかなか普通じゃできないことです。将来、成功するかどうか全く分からない、今の文枝さんの姿など想像もできないわけですから。それは一人息子を育ててきた親にしてみたら、たまらなかつたでしょう。ご本人も、そこが大きな決断だったと思います。

文枝 今のようなお笑いブームではなかったですからね。落語は明治の中ごろに最も栄えて、それから衰退の一途をたどり、僕が弟子入りしたころは上方の落語家は20人いるかいなかったかでした。

上原 今はかなりの数になっているのでしょうか？

文枝 上方落語協会の会員は230人を数えるまでになっています。

上原 文枝さんの頑張りとともに、上方の落語家も増えてきた？

文枝 僕の場合は、ラジオの深夜番組が大ヒットしていくのうまく乗れたのです。ちょうど、団塊の世代が受験期に入っていました。

◆自分の人生は自分で決断して生きていこう

上原 古典落語から創作落語の道に進まれたことだけでなく、先代の桂文枝師匠とは、少し芸風が異なるように感じるのがが……。

文枝 米朝師匠の知的な香りの漂う落語を知ってから、いろんな落語家の囁を聴くようになりました。そこで五代目文枝師匠のはんやりとして、非常に色っぽい、大衆的な落語に引かれるようになりました。あの上方らしい柔らかさと華やぎのある芸風は魅力です。それで弟子になったのですが、弟子の中では異色だったと思います。

上原 文枝さんの創作落語集を拝見しましたが、言葉と身ぶりだけで人を引きつけていく芸のすごさを感じました。既に220

本以上の創作落語を発表されたそうですね。やはり並みの人じゃないですよ。それだけのことができるのは、才能に磨きをかけてこられたから。努力なしにできるもんじゃないです。学生時代も、創作的なことはしておられたのですか。

文枝 とても高座にかけられるような出来ではないですが、実験的にやっていました。学生さんの前でやるときは、やはり学生さんに喜んでもらえるようなものを披露したいと思って。古典落語の世界は、今から50年近く前でも、もう遠い昔の話でした。ですので、学生がアルバイトで経験したようなことを落語に盛り込むようにしました。

僕自身も大学時代にアルバイトをしてたくさんの人を見てきましたし、この世界に入ってから視聴者参加番組でいろんな方とお会いしてきました。その経験が基になっています。落語を聴くお客さんは現代を生活している人々であり、落語にも今の笑いが必要です。落語というものは時代に合わせて進化していくものだという考えを、ずっと持ち続けて創作に励んできました。上原 新しいことをしようとするれば困難が伴いますし、決断が要求されます。古典落語を封印して創作落語で勝負しようと、大きな決断をされたわけですね。

文枝 そうです。自分の人生は自分で考えて生きていくしかありません。小学校5、6年生の担任だった渡辺章という先生の言葉が、いつしか僕の人生訓になっています。卒業のとき、サイン帳みたいなところに書いていただいた言葉です。「宇宙の大きさに比べて、人間の人生のなんと小さなものか」。みんなに同じ言葉を書かれたのかと思っていたら、違ったのです。母一人子一人の状況にめげずに頑張るって生きる。そんな意味も込められていたと思います。渡辺先生は若くしてお亡くなりになりましたが、どうせ小さな人生なら、決断すべきときは大きく勝負に出るように、この言葉が僕の背中を押してくれました。

◆自分の得意なものを何か一つ身につけよう

上原 関西大学には今、体育会のクラブ・単独パートが49、落語大学も含めて文化会が26、学術研究会が22あります。私は長年、学術研究会の一つ、法律相談所の学生と一緒に全国各地を回って無料法律相談を行ってきました。私は学生に、自分の進むべき道を早く見つけて、それに向かって勉強するように言い続けてきました。

文枝さんのように、それぞれの分野で一流の仕事をされている先輩の存在が、学生にとっては大きな刺激になり、目標になります。この機会に、学生に対してメッセージをお願いします。文枝 月並みな言葉ですけども、「よく遊びよく学べ」ですね。遊ぶといってもいろんな遊び方があり、学生時代にしか経験できないことがいっぱいあります。スポーツを楽しむことや、クラブ・サークルの活動もそうでしょう。皆と交流を深めて、自分の得意なものを何か一つ身につけることが、将来きつと役に立ちます。

関西大学には130年近い歴史があり、幅広いところで先輩・後輩のつながりがあります。どこの放送局へ行っても、海外へ行っても、関西大学の先輩がいて後輩がいて、全然知らない人

私も弁護士になりたいという確固たる目標を持って大学に入ったわけではありません。将来の方向や進むべき道は、入った大学によって大きく左右される面があります。



上原 洋丸(うえはら よういん)  
1933年香川県生まれ。57年関西大学法学部卒業後、大阪市立大学大学院法学研究科に進み、58年司法試験合格、59年同研究科修了。61年から弁護士を開業。関西大学司法試験受験研究会で指導に当たり、関西大学法律相談所の顧問を務める。95年大阪弁護士会会長、近畿弁護士会連合会理事長、日本弁護士連合会副会長。2004～06年関西大学大学院法務研究科(法科大学院)特別顧問教授。03～06年関西大学校友会会長。関西大学常務理事、専務理事を経て、08年10月理事長に就任。

ともすぐに仲よくなれるのは、この大学のすごいところだと思います。

上原 さて、六代桂文枝を襲名されてまだ日が浅いですが、桂文枝としてのこれからの抱負をお聞かせください。

文枝 まだ桂文枝という名前には慣れないのですが、文枝を襲名してよかったかどうかというのは、これは後の人々の判断によると思います。自分で自分の流れを変えようと、自ら決断したこと。これから先、落語家の人生を芸一筋で行くためにも、この襲名は大きかったんだなあと思っています。

よく皆さんから、桂三枝の名がなくなることはもったいないなどと言っていて、それはそれでありがたいのですが、自分としては、この決断がよかったんだと思えるように頑張るつもりです。

上原 文枝師匠は自分の道を自分で開いて突き進んでこられました。これからも第一人者として、創作落語の道を究めてください。本日はどうもありがとうございました。

# LEADERS NOW!

## みんなで福祉の世界を引っ張っていこう

### 社会福祉士を目指す人間健康学部第1期生

●人間健康学部3年次生

山本 夕貴 さん

社会福祉士になって福祉の現場で働きたいと考えている山本夕貴さんは、関西大学人間健康学部の第1期生。高校3年生のとき、関西大学に新学部ができることを知った。「ここ」「からだ」「くらし」を総合的にとらえ、健やかでおおらかな生き方を目指すという教育目的に共感し、「ここに行こう」と決めた。実際に入ってみて、どうだったか――。



第1期生ということは、当然、先輩がいない。「将来の進路のことも、先輩に話を伺ったりできないのはちょっと残念ですが、そのぶん同級生の結束が固くて、友達とよく話をします。これから始まる実習や社会福祉士の国家試験などに対する不安があっても、みんなで頑張って福祉の世界を引っ張っていかうぜ、みたいな感じで心強い」

先輩はいなくても、山本さんたちの学年は、1、2年次生から見れば先輩。この日も、山本さんを囲んで後輩たちと話が弾んでいた。

「2年次生のとき、児童や障害者、高齢者の福祉施設を見学し、お話を聞かせていただきました。どこの施設へ行っても、職員さんがすごく輝いている。頑張っておられる姿を見て、カッコいいなと思いました。福祉の仕事って、しんどくて大変でも、楽しそうなんです。私も福祉の場で働きたいと改めて思いました」

山本さんは、笑いやユーモアに関する授業が面白かったという。笑いの文明史、ユーモアの思想史、ユーモアコミュニケーション論等々。「福祉は人と接する仕事。コミュニケーションの

仕方やその場の雰囲気づくりを学ぶのにも役立ちます。福祉レクリエーション論は、先生に毎回いろんなレクリエーションを教えてください、みんなでワイワイ言いながら実際にやってみる楽しい授業でした」

山本さんが今、特に力を入れて勉強しているのは、福祉に関する法律や制度。「今のままでは、相談を受けても何も解決してあげられない。知識や技術をもっともっと身につけていかないとだめです。気持ちだけではどうにもならないので」

8月10日から、堺市の福祉事務所で1カ月間の実習が始まった。やがて卒業論文も待っている。生活保護にかかわる自立支援プログラムや就労支援について調べる予定だ。

「生活保護が問題になっていますが、頑張っているけれども職に就けない人たちがたくさんいます。給付するだけではなく、その人たちが自分で生活できるように支援していくことが重要です。貧困の連鎖といわれるように、生活保護を受けている世帯の子どもは教育の機会が少ないことも問題です。

人の力になれる仕事がしたいと思って学んでいくうちに、障害者福祉、児童福祉、高齢者福祉、どの分野も問題が山積みであることが分かりました。何か事件が起こらなければ、児童の虐待も話題に上りません。これはやばいぞ、頑張らないといけないと思います。

福祉について考えることは、普段の暮らしの幸せについて考えることだと教わりました。それは障害者や子どもや高齢者など社会的弱者に限られるのではなく、みんなに関係することじゃないですか。みんなの暮らしが幸せになるように自分の培った知識や技術を使えるって、すごくいい仕事だと思います。私は、みんなが少しでも幸せな生活ができるように力添えしていきたい」



山本 夕貴 ―やまもと ゆき  
 ■1991(平成3)年、大阪府生まれ。大阪府立長野高校卒業。人間健康学部人間健康学科福祉と健康コース3年次生。趣味はロック音楽鑑賞。「法律や制度と現実との矛盾を感じたり、もうちょっと融通が利けばいいのと思うようになって、福祉行政にも興味が出てきました」

## 目標は リオデジャネイロ・パラリンピック

### 障害者スポーツとしてポッチャの普及を目指す

●ポッチャ 選手

高田 信之 さん ―文学部2002年卒業―

障害者スポーツは多様化し、競技人口も増えている。ヨーロッパで考案され、世界に普及しつつあるポッチャは、パラリンピックの正式種目。関西大学卒業後に海の事故で重傷を負った高田信之さんは、リハビリを通じて出会ったポッチャに夢中になり、今では国内トップクラスの選手になった。目標は、2016年のリオデジャネイロだ。

ポッチャは、赤・青6球ずつの柔らかいカラーボールを白い目標球(ジャックボール)に、どれだけ近づけることができるかを競う。投げたり、転がしたりするだけではない。ボールで壁をつかって対戦相手の接近を邪魔したり、優位に立つ相手のボールを狙ってはじき飛ばしたりもする。作戦や相互の駆け引きも要求される。



試しに、カメラマンなど取材陣もポッチャに挑戦してみた。やってみると、思わず熱中してしまうほど面白い。小学校でポッチャの普及活動を行っている高田さんに、ある子どもが「ポッチャが面白くてもっとうまくなりたいから、僕も高田さんみたいにけがをしてもいいなと思いました」と言った。そんな率直な感想どおり、初心者から高度な技を磨いている人まで楽しめる、奥の深い競技だ。

高田さんがポッチャを知るきっかけとなった事故は、関西大学を卒業した翌年の夏に起きた。理学療法士を目指してアルバイトをしていた公営プールのインストラクター仲間と海へ遊びに行き、飛び込んだところが浅瀬だった。

高田さんは子どものころから水泳を習い、関西大学では第2部体育会水泳部に所属。「なまじっか水泳をやっていたから、きれいな角度で飛び込んで、まともに首の骨を折りました」。3日間意識がなく、手術した病院に3カ月、リハビリ病院に1年3カ月入院した。

「僕は地球にけんかを売った、地球の裏側のブラジルあたりでは地震で揺れたはずだ、と言い続けています。実際、落ち込んだのは1日だけでした。頸椎損傷で手足は動かず、ずっと車椅子生活だと言われて、それが自分の中で納得いかなかったのです」



高田 信之 ―たかだ のぶゆき  
 ■1979(昭和54)年、大阪府生まれ。2002年関西大学文学部教育学科心理学専攻卒業。03年7月に、海で浅瀬に飛び込んで頸椎損傷の重傷を負う。「自分が障害者になって、また障害者の方々と接するようになって、違う目線で社会を見るようになりました。障害者にかかわる制度や法律がころころ変わったり、ヘルパーさんの待遇が改善されないことも問題です」

必死にリハビリに取り組んだ結果、左肩がわずかに動く状態だったのが、自分でご飯を食べ、車椅子で移動するなど、できることがどんどん増えていった。

そして、ポッチャとの出会い。リハビリの一環ではあったが、最初は軽い気持ちで、競技というよりもレクリエーションとして、ボールを使って一緒にワイワイやっているのが楽しかった。

ポッチャは重度脳性まひや四肢重度機能障害の人を対象に、BC1~4のクラスに分けられ、個人戦と団体戦がある。高田さんはBC4クラスで、国内トップを狙うまで実力をつけてきた。2009年には、香港で開催された大会に出場した。

「初めて海外で試合をして、そこそこ健闘して負けたのです。それが悔しかった反面、手が届かない相手ではないなと感じ、海外でもやれるんじゃないかと思うようになりました」

ポッチャの魅力はたくさんある。「思ったところに思ったとおり、びたっとボールが行ったときの気持ちよさ。また、標的自体もボールなので、動くたびに状況が変わり、一発大逆転も可能など面白いです」。高田さんは白い目標球に命中させて、それを並んでいる自分のボールに近づけるという妙技も見せてくれた。2016年のリオデジャネイロ・パラリンピックという大目標に自身を近づけるために、熟練の手からますます多彩な技が繰り出されることだろう。

■研究最前線

電力の独占と規制改革の研究

# 送電分離で 発電と流通に競争を！

地域独占からアメリカ・EUの電力供給モデル導入へ

●法務研究科（法科大学院）

滝川 敏明 教授

福島第一原子力発電所の事故は、計画停電を伴う電力供給の危機をもたらした。同時に、電力の送電分離論への注目が高まってきている。電力の送電分離は世界共通の課題であるという滝川敏明教授は、国際経済法の専門家としてアメリカやEUの先行例を踏まえながら、内外のシンポジウムなどで電力問題に関する研究発表や提言を行っている。

## ■ガラパゴス化する日本の電力供給システム

滝川敏明教授は法学部出身だが、アメリカでMBA資格を取得し、公正取引委員会、経済企画庁、パリの経済協力開発機構(OECD)日本政府代表部に勤務した経験のある経済法学者。国際的な視野で独占禁止法やWTO法、貿易摩擦などの問題を追究している。

現在の社会は、法律だけで片付かない、法律と経済が融合した多くの課題に直面している。福島原発事故によって露呈された日本の電力供給の在り方をめぐる問題もその一つだ。

滝川教授は、送電分離など電力の規制改革は、電力会社によ

る独占を問うところから出発しなければならないという。

「日本では独占禁止法といわれていますが、世界的には競争法というのがスタンダードです。市場の競争のルールをどう作るかということです。電力供給の在り方は世界共通の問題で、送電分離に関してはアメリカやEUで研究が進んでおり、既に政策が実施されています。そういう事例を見ないで日本だけで考えていると、まさにガラパゴス状態に陥ります。既に競争が機能してよってきたモデルが外国にあったら、それを取り入れるべきです」

## ■なぜ送電部門を切り離す必要があるのか

—まず、電力の送電分離とは？

電力市場は、発電、送電、流通(卸および小売)の階層からなる垂直的市場です。伝統的に、大電力会社が各階層を企業組織の中に垂直統合して経営を行ってきました。欧米で既に実施され、また日本で論議されている送電分離は、この各階層中の送電を垂直分離して、既存電力会社とは独立に経営させるものです。

電力は、送電線が自然独占(高压送電線を重複して建設することは経済上かつ環境上不可能)なので、既存の電力会社が送電線を所有しています。同時に発電と電力販売を実施し、電力全体が独占となっているのが日本の現状です。競争が及ばないため、効率化と技術革新が進まず、価格も高止まりします。

発電方法にはいろいろあり、原子力発電もその一つですが、風力や太陽光、地熱など環境に優しい方法も開発されつつあります。しかし、独占体は変化を求めません。小売業者も参入できません。したがって、電力会社から送電部門を切り離すことによって、発電と電力販売に競争を導入しようというのが送電分離の狙いです。実際に、アメリカと欧州諸国、アルゼンチンなどは送電分離を実行しました。



(滝川教授の著書・左から)  
「ハイテク産業の知的財産権と独禁法」(2000年、通商産業調査会)  
「日米EUの独禁法と競争政策」(第4版、2010年、青林書院)  
「WTO法—実務・ケース・政策」(第2版、2010年、三省堂)  
「貿易摩擦と独禁法」(1994年、有斐閣)



## ■送電分離で停電と電力価格高騰を回避するには？

—アメリカでは送電分離を伴う電力規制改革の弊害として、カリフォルニア大停電が起きたのではないのでしょうか。

アメリカは、垂直統合モデルと垂直分割(送電分離)モデルが混在しています。後者は北東部の諸州やカリフォルニア、テキサスなど14の州です。

確かに、2000年から2001年のカリフォルニア大停電により、電力規制改革は滞りました。発電施設が十分に稼働しなかったことが価格高騰を招きました。それが発電業者間の人為的な市場操作(カルテル的協調)によるものか、それとも発電施設の物理的な故障によるものであるかが論議されています。基本的に、電力自由化の過渡期であったといえます。

規制改革の流れの中で、かなりの州の電力会社が、規制当局の指導を受けて送電部門を自主的に分離し、電力会社から独立して送電線を運営する経営組織を設けました。また、送電分離を実施していない州でも、競争が導入されている点にも注目すべきです。

EU諸国では、送電部門の分離をEU委員会が加盟国政府に義務づけています。EUの国を越えて、送電線を一本化する動きがあることも注目されます。一方、地域独占体を形成している日本では、送電線が分断され、電力が逼迫したときに融通が利きません。東西で周波数まで異なっています。競争が成立しない独占体のままでは、電力供給システムの発展は望めません。

—市場自由化により、発電業者が増加し、コストが低下するなどのメリットは期待できるでしょうが、電力は貯蔵しておけないという特性があります。停電や価格高騰などのリスクは回避できますか。

競争のメリットについては、国際的に多くの実証結果があります。ただし、電力には常に瞬時に供給と需要が一致しなければならないといった特性があります。供給と需要が一致できない場合に大規模停電が生じます。この電力に特有の性格が市場操作を行いやすくします。それに対しては、先渡し取引により価格をあらかじめ決めておけば、価格つり上げを防止できます。

EUでは、大口顧客は先渡し取引の長期契約で対応しています。電力が足りなければ1日前が当日、リアルタイム市場で買い、余った分は売るわけです。価格が上がると供給が増えるの

で、上がりっぱなしにはなりません。カリフォルニア大停電とそれに伴う電力価格高騰は、先渡し取引を実施していれば回避できたといわれています。

## ■スマートグリッドは垂直分割モデルを後押しする

—テクノロジーの発展は、送電分離を推進する力になりますか。電力は貯蔵できないとされてきましたが、蓄電池の技術革新などにより、貯蔵が可能になりつつあります。

また、スマートグリッドと呼ばれる新しい電力網は、垂直分割モデルを後押しする機能を備えています。スマートグリッドにより、大規模施設の中央コントロールのシステムから、より小規模で非集権的なコントロール制度へ移行できます。小規模の分散発電と中規模の発電施設の組み合わせがスムーズに行われるので、独立小規模の発電業者を受け入れやすくなります。

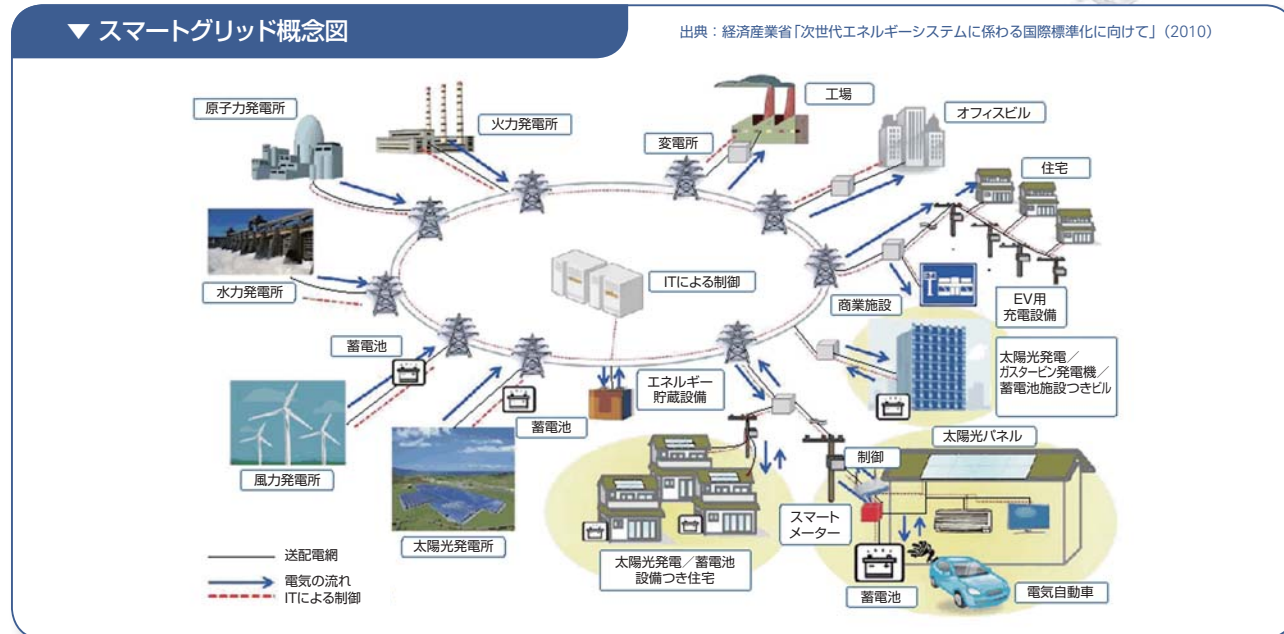
スマートグリッドはIT(情報技術)を活用して電力需給を効率よく調整するシステムですが、各家庭においてはスマートメーターをイメージしていただくとういでしょう。いわば、電力メーターをコンピューター化したものです。電力のピーク時に価格が上がり、消費電力を減らせます。時間ごとの変化料金に応じて、消費と自家発電を自動調整することもできます。

—電力市場についての研究から、日本が選択すべき方向が見えてきますね。

地域独占体の弊害は、スマートメーターの規格が国内でさえ統一されないところにも表れています。アメリカと欧州の業界ではスマートメーターの規格を統一しようという動きが進んでいます。そうなる前に、日本が世界規格に打って出なければいけないはずだ。

電力市場におけるアメリカとEUの動きは、総体として、垂直分割をもたらす規制改革が望ましいことを示しています。また、単一送電ネットワークのカバーする範囲が広いことが、大停電の防止につながります。そのためには、発電と電力販売に競争を導入するとともに、日本全体をカバーする送電ネットワークが必要です。

この分野で、日本はきわめて遅れています。計画停電の危機にある今動かなければ、さらに取り残されてしまう可能性があります。徐々に手直しするという発想ではなく、世界と将来を見据えて一挙に変える電力改革政策が望まれます。



研究最前線

中性子ラジオグラフィによる流動沸騰系の研究

熱流動現象を可視化・定量評価

脈動（揺れ）が流動特性に与える影響を評価する実験

◎システム理工学部 機械工学科 熱工学研究室  
梅川 尚嗣 教授

原子炉やボイラー、空調機器などの管の中では、沸騰した液体や蒸気がどのように流れ、変化しているのか——目に見えない管内の動きをとらえ、高精度に定量評価するために、梅川尚嗣教授を中心とする熱工学研究室では、中性子ラジオグラフィを用いた実験で成果を上げている。

沸騰に伴う伝熱・流動現象の解明を目指して

——まず、研究の概要を教えてください。

私たちが行っている流動沸騰系の伝熱・流動現象の研究は、原子炉の開発とともに1960年代から90年代にかけて急激に発展してきました。原子炉やボイラーの管内では、沸騰二相流といわれる蒸気と液体が混在する流れが形成されます。その挙動が、機器の性能や安定性に大きな影響を及ぼします。

沸騰系でも、流動しない場合は、計測器と計算機の進歩によって高精度に解析できるようになりつつあります。例えば、ヤカンの水が沸騰してどのように蒸気が変わっていくかというような単純なものなら、近年やっと、細かな動きが解明されつつあるところではあります。

しかし、流動沸騰系では、同一の流体であっても、熱流束（単位面積を流れる熱エネルギー量： $W/cm^2$ ）をはじめ、圧力、管の内径や長さ、形状、流動方向などによって変動します。さらに、脈動と呼ばれる揺れによっても大きく影響を受けます。

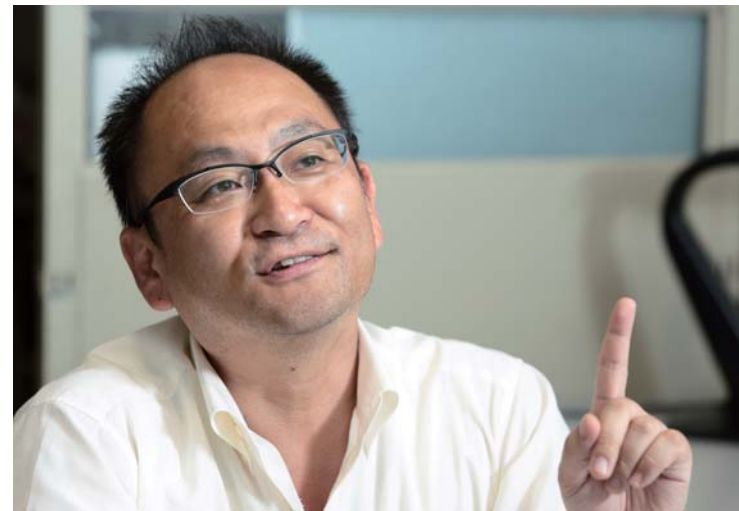
この分野は、何十年にもわたる研究の蓄積がありデータもあるのですが、複合して発生する現象はまだ未解明なところがたくさんあるのが現状です。特にこのような私たちの分野では、理学的なアプローチと工学的なアプローチのバランスが必要だと考えます。

幸い、関西大学には優れた研究設備があります。20ボルト、5000アンペアに対応する実験装置を使用することで、さまざまな実験が可能となり、高速度ビデオによる撮影や解析などを行っています。

沸騰二相流の流動様式の変化をとらえる

——気体と液体の沸騰二相流の流動様式は、例えばどのような特性が見られますか。

図1では、流れ方向に沿って、下から上へ、気泡流、スラグ流、チャン流、環状流と変化します。気泡流の段階では、管



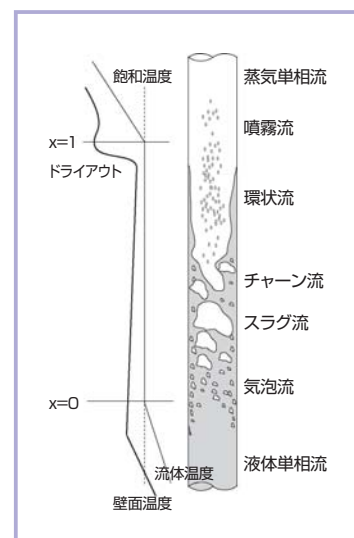
中央では冷たい水により気泡は凝縮しますし、小さな気泡は壁側に寄ろうとします。

しかし、沸騰が活発となって、気泡が大きくなってくると、今度は逆に気泡は真ん中に集まってスラグ流になります。スラグ流になってさらに流速が上がってくると、混ぜるという意味からつけられたチャン流になります。そして、真ん中が抜けて蒸気の流れができる環状流に変わります。やがて蒸気単相流になり、さらに進むとドライアウトが起きます。

初期段階では壁面での沸騰の強さが伝熱を支配するものの、環状流では、蒸気と液膜との界面での伝熱が支配的になります。しかし実際には、この薄い液膜の中でも沸騰が発生するなど、伝熱のメカニズムは複雑です。これはドライアウト後に残った液滴による伝熱もそうで、特に脈動が加われば、現象はさらに複雑に変化します。

このような揺れを伴う非正常な問題に対しては、従来の実験と測定法では、十分な評価を行うことが困難です。そこで私

たちは、物体内部を透視することができる中性子ラジオグラフィを用いることにしました。これにより非破壊で通電しながら、管内の直接的な観察が可能となります。



◀ 図1：沸騰流の様子と管内および管壁の温度分布



熱流動現象に中性子ラジオグラフィで迫る

——沸騰二相流の可視化を可能にする中性子ラジオグラフィを使った実験の内容は？

中性子ラジオグラフィは、X線の可視化手法と同様に、放射線に対する物質の透過特性の違いを利用しています。中性子源としては、京都大学原子炉実験所の研究炉を利用しています。今回は、炉の改修に伴う周辺設備の整備に検討段階から参画することで、私たちの研究目的に特化した設備を構築することができました。

実験には原子炉を用いますが、出力は小さく、正しい知識で行えば、簡単なシールドで容易に実験が行えます（図2）。透過した熱中性子線は蛍光コンバータで可視光に変換し、これを高感度CCDカメラで撮像します。

また、この設備では上下の昇降を可能にしており、縦長の管の加熱部全域にわたる流動沸騰状態、管内の変動の様子が撮影できます。この全長にわたる詳細なデータは、今まで得られなかった貴重な情報となります。

特に今回は、流動脈動（揺れ）が限界熱流束に与える特性を内部の挙動も含めて把握できたことは大きな成果です。これまでも、揺れたらドライアウトの条件が低下することは知られていましたが、系統だった整理は存在していませんでした。

今回は加振器で機械的に揺る実験を行い、振幅と周期で整理ができるようなモデルを作りました。また加振器とCCDカメラを同期させ、画像積算を施すことで、定量評価に対応できる画像の取得を可能としました。



▲ 京都大学原子炉実験所の研究用原子炉

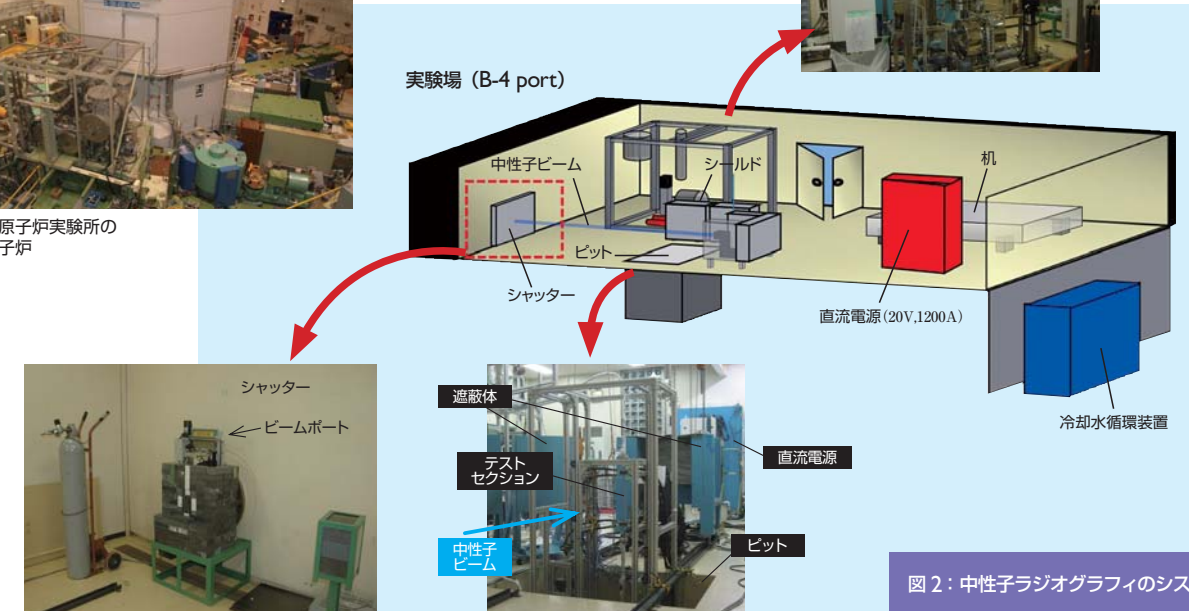
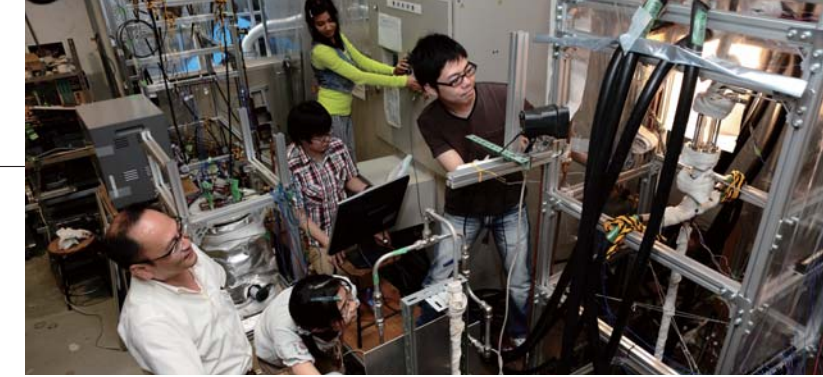


図2：中性子ラジオグラフィのシステム図



具体的には、限界熱流束が脈動振幅の増加に伴って定常流動時の40%程度まで低下することを、解析と交えて示すことができました。また、管の熱容量の増加に伴う、限界熱流束への影響評価が重要であることを示しました。

管の熱容量が流動特性に与える影響を探る

——今後の課題は？

肉厚が異なる管で、同様のデータ取得を行い、管の熱容量が流動特性に与える影響を評価することです。これは、管が持つ熱容量が沸騰状態にどうフィードバックするかという評価となり、例えば原子炉の緊急冷却時にどうすれば早く冷やすことができるのかというような評価にもつながる重要な特性となります。

現実には、このような揺れた場での問題をきちんと取り扱える手法は確立できていません。私たちの実験で既に一般的な流動特性は説明できますが、脈動や管の熱容量を把握したうえで、管との相互作用を追究していくつもりです。

——教育指導面で重視されていることは？

学生の自主性です。自主性を尊重するから、対等の議論を求めます。初めは理解できなくても、ものが見えてくるようになります。ものが見えてくれば、研究の面白さも見えてきます。

研究テーマの設定から発表に至るまで、学生が主体的に動くことを期待しています。学外の人との交渉事なども、なるべく学生に任せています。今の学生に圧倒的に不足しているのは経験することだと思っていますから、学会発表や研究会への参加など、できるだけ多くの経験を学生にってもらいたいと思っています。

## LSI実装技術で世界初の成果を国際学会で発表

### 3次元LSI貫通電極のオールウェット形成



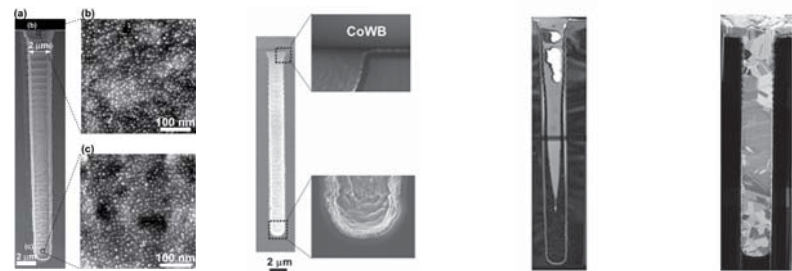
●システム理工学部  
新宮原 正三 教授

システム理工学部の新宮原正三教授らの研究グループは、3次元LSI実装技術において、次世代のオールウェット貫通電極(TSV)形成技術を世界で初めて開発した。高真空装置を必要とした従来技術に比べて、製造プロセスの低温化、低コスト化、微細化や高機能化に大きく寄与する本技術は、5月末に米国で開催された国際学会で発表された。

#### ▼従来の貫通電極形成技術の問題点解消へ

LSI(半導体集積回路)技術は1970年ごろから2000年代に至るまで、微細化により3年で4倍の高密度化を達成してきた。しかし、微細化が極限に近づいてきたため、微細化によらずにLSIの機能を向上させる手段として、3次元LSI技術が脚光を浴びている。薄いシリコン基板を縦に積み重ねる3次元LSIの形成技術の柱の一つが、シリコン基板を貫通する電極形成技術である。

#### ■オールウェットTSV形成技術の各工程後の断面電子顕微鏡観察像



図①: Pdナノ粒子触媒吸着処理後 図②: バリアメタル(Co合金)無電解めっき後 図③: Cu無電解めっき後 図④: Cu電解めっき後

貫通電極(TSV)では、低抵抗材料である銅(Cu)を埋め込み形成する。従来の貫通電極形成技術では、バリアメタル堆積とCuシード層堆積の工程で、コストの高い高真空装置を使用し、高温工程(400℃程度)が含まれるなどの問題点があった。新宮原教授と理工学研究科博士後期課程の井上史大さんらは、従来のバリアメタル堆積とCuシード層堆積を無電解めっき技術で行う、世界初の「オールウェットTSV形成技術」を開発した。

#### ▼「オールウェットTSV形成技術」とは?

新宮原教授は、本技術の特徴と利点を次のように解説している。「無電解めっきによるバリアメタル堆積では、その前にパラジウム(Pd)ナノ粒子による触媒吸着処理を行います。すべて溶液中での湿式処理ですので、「オールウェットTSV形成技術」と呼ぶことができます。湿式法では、温度がたかだか80℃以下の低温プロセスとなり、試料への温度ストレスが低減でき、また装置コストが低減できるというメリットがあります。

Pdナノ粒子は、直径5nm程度のもを使用。図①に示すように、TSV内部の側壁および底部に高密度にPdナノ粒子が吸着していることがわかります。また、無電解バリアメタル(CoWB)膜は、膜厚50nm程度で均一な厚みでTSVの内部に連続に堆積しており(図②)、Cu無電解シード層はボトムアップ的にTSVの底部より優先的に堆積しています(図③)。最後のCu電解めっきによってTSVは完全に埋め込まれています(図④)。

研究成果は5月31日、米国サンディエゴ市で開催された国際電気電子技術協会(IEEE)主催のLSI実装技術およびパッケージ技術に関する世界最大の国際学会(ECTC)で発表された。

## 文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択

### 希薄水溶液中の有価物・有害物質の分離を通じた水環境技術開発拠点の形成

●先端科学技術推進機構・環境都市工学部  
三宅 孝典 教授



各大学の経営戦略に基づいて行う研究基盤の形成を支援するため、研究プロジェクトに対して文部科学省が重点的かつ総合的に補助を行う平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に、関西大学先端科学技術推進機構が申請したプロジェクトが採択された。研究代表者は環境都市工学部の三宅孝典教授、研究期間は平成24年度から5年間。

#### ▼対象は無機有害物質、有機物質から有価物まで

文部科学省平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された研究プロジェクトは、「希薄水溶液中の有価物・有害物質の分離を通じた水環境技術開発拠点の形成」。「水」に特化した技術開発を担うプロジェクトであり、従来技術で対応可能な範囲よりもはるかに低濃度の有害物質あるいは有価物を分解・分離除去・回収する高度な水処理技術の創出を目指している。

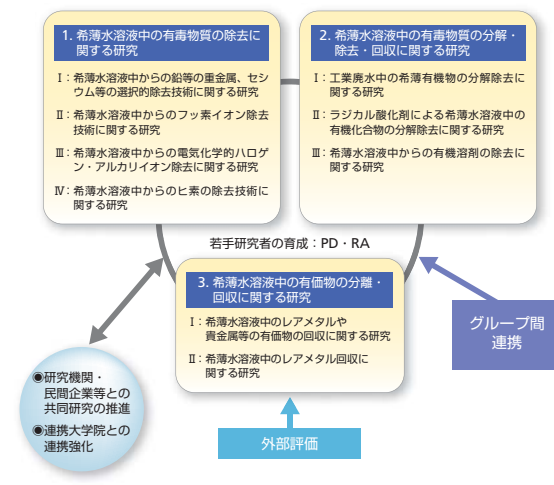
具体的には、図に示す3つの要素研究領域を設け、これらの連携を図りながら技術開発を進める。

#### ▼多領域にわたる水資源循環工学として体系化

研究代表者の三宅教授は、水資源循環工学として体系化する狙いや意義について述べている。

「世界的に先導的な役割を果たすために、これまで本学において推進してきた研究を基盤として、要素技術の開発と水循環システムに対する運営・管理に至る一連の実践的取り組みを、水

#### ■希薄水溶液中の有価物・有害物質の分離を通じた水環境技術開発



資源循環工学として体系化します。水環境分野は多くの研究領域がかかわっています。本プロジェクトでは、化学工学、触媒化学、電気化学、材料化学などを専門とする幅広い研究者が参画することから、水供給、再利用、資源回収における水の質と量の両面の総合的な最適化が可能であることも、大きな意義と言えます。

従来、高濃度で混在する元素・イオン・有機物の除去や回収技術は確立されてきました。今後問題となってくる低濃度で存在する有害物質や有価物を分離し、広く水循環を改善することに資する技術を確認することにより、人類の安全・安心な発展に貢献していきたいと考えています。

## ● ロンドン五輪に本学現役学生が出場

### 4×400メートルリレーで東佳弘さんが快走



8月3日から10日間にわたって熱戦が繰り広げられたロンドンオリンピック陸上競技に、関西大学の学生が出場した。陸上男子1600(4×400)メートルリレーの日本代表選手として世界の大舞台に立ったのは、体育会陸上競技部の東佳弘さん(人間健康学部3年次生)。

東さんのアスリートとしての素質が開花したのは、関西大学の陸上競技部に入ってから。コーチ陣の指導のもと、練習時間以外にも目標を自ら設定し、トラックでトレーニングを重ねた。特に今年からは、短い距離でのスピード練習に力を注ぎ急成長、わずか半年あまりで1秒7以上タイムを短縮した。5月に関西インカレ400メートル優勝、6月に日本陸上競技選手権大会(ロンドン五輪最終選考会)第3位(記録46秒26)と躍進した。

本学現役学生が夏季オリンピックの陸上競技種目に出場するのは、76年ぶりの偉業。7月5日には千里山キャンパスで東さんの壮行会を開催。学歌・応援歌を斉唱し、約200人が熱い声援を送った。

男子リレー種目は8月9日に予選が行われ、試合時間に合わせて千里山キャンパス凜風館の大型スクリーン前に学生らが集まり、応援会を開催した。東さんは4人のうちの3番目のランナーとして快走したが、日本チームは6位に終わり、決勝進出はならなかった。

「競技場の雰囲気が今までと全然違って緊張しましたが、いい経験ができました。来年のユニバーシアード大会、世界陸上競技選手権大会(ともにロシアで開催)出場を目指してこれからも頑張ります」と、東さんは世界を視野に入れた次の目標に向かっていく。

## 関西大学3キャンパスで市民参加のイベント実施

### ●高槻ミュージックキャンパス 社会安全学部「安全フェスティバル」開催



実験装置を用いて液化現象のメカニズムを解説する社会安全学部生

社会安全学部がある高槻ミュージックキャンパスで6月10日、第1回目の「安全フェスティバル」が開催された。「安全に関する知識を“あなた”と共有する」をテーマに、社会安全学部祭典実行委員会が企画・運営を行う学生主体の催しであり、自衛隊や高槻市消防本部など学外の方々も招いてイベントを実施した。防災グッズの解説や液化現象実験、

高槻市の地域物産展、日本各地にある保存食の紹介など、学生のこれまでの活動、その頑張り、魅力が十分に伝わるイベントばかりであった。

ミュージックホールでの講演会「そこまで言わなくて委員会～高槻の防災力を知る!!～」では、河田恵昭学部長による基調講演の後、越山健治准教授、永田尚三准教授、永松伸吾准教授に学生を交えたパネルディスカッションが行われ、活発な議論が展開された。



河田恵昭学部長による基調講演



高槻市消防本部

### ●高槻キャンパス アイスアリーナを開放「高槻市民デイ」

総合情報学部祭典実行委員会が企画・運営を行う高槻キャンパス祭は、今年で18回目を迎えた。本学学生同士の交流はもちろんのこと、地域の人々とのふれあいの場として発展している。



高槻キャンパス祭

5月27日に高槻キャンパス祭の一環として、「アイスアリーナ高槻市民デイ」を実施。市内の小学3年～6年生約100人とその保護者らが、体育会ア



▲関大アイスアリーナでアイススケートを楽しむ子どもたち

イススケート部とアイスホッケー部に所属する学生による滑走指導を受けながらアイススケートを楽しんだ。

関西大学アイスアリーナは、本学創立120周年記念事業の一環として建設された。近隣の小・中・高等学校の課外行事での利用などに対しても施設を開放し、社会貢献の一翼を担っている。

### ●堺キャンパス 「堺キャンパス祭」“Laugh Laugh Love”



第2回堺キャンパス祭は6月24日に開催された。「笑い」も研究対象となっている人間健康学部らしく、今年のテーマは「Laugh Laugh Love～なあ、なんで笑顔になってしまうんやろ?～」。

人間健康学部祭典実行委員会の学生が主体となり、ステージ企画や子ども向けサッカー教室などを運営した。世代を超えて地域の方々が参加できる企画が充実していることも、堺キャンパス祭の特色だ。市民によるフリーマーケット、堺キャンパスの各種団体の模擬店、応援団バトン・チアリーダー部のチアステージ、関西大学のOB・OG組織である校友会の物産店や地域の名産品の販売などもあり、2,200人を超える地域住民の方々に堺キャンパス祭を楽しんでいただいた。



子ども向けサッカー教室

## 社会的信頼システム創生センターが中心となって 連携事業を展開

Research center for Social Trust and Empowerment Process

### 岩手県大槌町と連携協力協定を締結 IT教育、新規雇用創造による自律的復興支援



▲協定書の調印式を行った 楠見晴重学長(右)と碓川豊大槌町長

関西大学と岩手県上閉伊郡大槌町は、連携協力に関する協定を締結することで合意に達し、7月10日に大槌町役場仮庁舎(旧大槌小学校校庭内)で、楠見晴重学長、碓川豊大槌町長らが出席して調印式を行った。

この連携協定は、地域の潜在的資源(現在、常勤の職を持っていない地域住民、あるいは職があればUターンを志望する地域外居住者)を育成し、地域に新産業を創生する、雇用創出プロジェクトを推進することを目的としている。

具体的には、IT関連企業を、外部からの誘致ではなく、地域住民主体で新たに起業し、その企業が自律的に経営されていくところまでサポートすることを計画している。岩手県大槌町に限定して事業展開し、特定の地域での成功事例を構築することで、今後、他地域へも展開できるような基本モデルを構築する。

関西大学では、2011年7月から社会的信頼システム創生センター(STEP)のメンバーが中心となり、「コミュニティ主体の復興をささえる commons の構築—『もやいの家』を通じた地域の再生」と題した展開研究を開始しており、2011年12月までに宮城県気仙沼市、岩手県陸前高田市、釜石市、遠野市、大槌町の各市町の仮設住宅および行政に対して詳細な聞き取り調査を行った。その結果、岩手県大槌町との連携協力が成功モデル構築に最もふさわしいとの結論に達し、このたびの調印の運びとなった。

### 関西大学リサーチ・アトリエが大提灯を掲示 お披露目のオープニングセレモニーを挙行

社会的信頼システム創生センター(STEP)が設置する関西大学リサーチ・アトリエは6月23日、縦2.2メートル直径1.8メートルの大提灯をお披露目するオープニングセレモニーを挙行した。

関西大学リサーチ・アトリエは、設置後約2年が経過し、まちの風景に溶け込んでいくが、初めて訪れる人には所在地が分かりにくかった。そのため、天神橋筋2丁目商店街にある参詣道を指示する大提灯と同型・同サイズの大提灯を関西大学リサーチ・アトリエの前に掲げ、指示設備とすることになった。天神橋筋商店街と連携した地域研究・社会貢献拠点のシンボルにもなる。

提灯の設置にあたっては、大阪市北区天満で1858(安政5)年から続く伝統技術継承事業者である「提灯舗かわい」の協力のもと、約2カ月かけて制作を進めた。オープニングセレモニーでは、大阪天満宮による祈禱の後、応援団吹奏楽部による学歌の演奏とともに大提灯が吊り上げられ、多くの買い物客の注目を集めた。

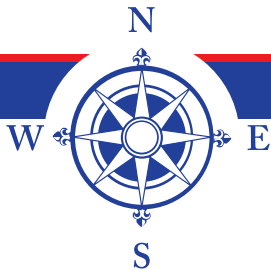
関西大学と天神橋筋商店街連合会は、2007年11月、商店街とゆかりの深い大阪天満宮や天満天神繁昌亭など地域の文化拠点とも連携し、地域全体の活性化を目指す協定を締結している。



(左から)楠見晴重学長、土居年樹天神橋筋商店街連合会・会長、上平康晴大阪市北区長(当時)、与謝野有紀教授

# STEP





竹内洋・東京センター長が読売・吉野作造賞受賞



第13回読売・吉野作造賞を受賞した竹内洋・関西大学東京センター長

関西大学人間健康学部の初代学部長を務めた竹内洋・関西大学東京センター長が、第13回読売・吉野作造賞を受賞した。受賞作は『革新幻想の戦後史』(中央公論新社)。日本の戦後史が単純な保守と革新の対立図式では要約できない複雑な構造を持つことを、膨大な文献資料と聞き取り調査によって解き明かしたことが高く評価された。贈賞式は7月10日、東京・丸の内のパレスホテル東京で行われた。竹内東京センター長は、首都圏における本学の拠点である東京センターでの支援活動とあわせて、今後もさまざまな研究・執筆活動を行うことを表明した。

竹内東京センター長の専門は、歴史社会学、教育社会学。3月9日には、竹内教授の定年退職に伴う最終講義が千里山キャンパスで開催され、多数の学生や教職員が聴講した。

大阪マラソン2012に関西大学が協賛

第2回大阪マラソン(大阪府・大阪市など主催)が、11月25日に開催される。既に定員(3万人)の5.2倍にあたる15万5482人の応募があり、抽選で出場ランナーが決定している。

昨年の第1回に引き続き、関西大学はオフィシャルスポンサーとして大会運営に協力する。給水所で活動する給水ボランティア400人をはじめ、応援団バトン・チアリーダー部など、沿道の観客とともに声援を送り大会を盛り上げる応援団も参加する。メンタルトレーニングなど、実践的なアドバイスが好評だった関西大学と大阪よみうり文化センターの公開講座は、今年も開催される。



昨年大阪マラソンで給水ボランティアを行う学生たち

サッカー日本代表・本田圭佑選手が本学で講演



サッカー日本代表の本田圭佑選手が6月15日、本学を訪れ、学生100人に向けて講演した。当日は本田選手と関大生が「競争社会の重要性」、「海外から見た日本」、「今後の日本に必要なもの」などをテーマに、近い距離でディスカッションを行った。学生たちは、世界の大舞台上で活躍する本田選手の言葉に目を輝かせて聴き入っていた。本田選手は講演後、学生からの質問に答え、最後に参加学生全員と握手をして本学を後にした。

大学院社会安全研究科博士課程後期課程開設記念シンポジウムを開催



関西大学は2010年4月に社会安全学部・大学院社会安全研究科修士課程を同時開設し、文理を学際融合した防災・減災分野である「社会安全学」の研究教育に着手した。「社会安全学」は、東日本大震災のような広域かつ複合的な課題解決のために必要不可欠であることから、本学部・研究科は社会の注目を集め、更なる期待を担うようになった。このような中、本年4月、社会安全研究科博士課程後期課程を開設した。

その開設を記念したシンポジウムが7月28日、高槻ミューズキャンパスで開催された。テーマは「クライシス・リーダーシップ～危機に対し経営者のリーダーシップはどうあるべきか～」。アーノルド・ホーイット氏(ハーバード大学アッシュセンタースタッフディレクター)、角和夫氏(阪急阪神ホールディングス(株)代表取締役社長、関西大学客員教授)、萩尾千里氏(株)大阪国際会議場取締役相談役、関西大学客員教授)が講演。続いて、河田恵昭教授(社会安全学部長、大学院社会安全研究科長)も加わり、パネルディスカッションを行った。